『明暗』女の生き方

Junko Higasa

『明暗』―そのタイトルは、どのような結婚を選択するかによって分かれる「女の賢明度」のようである。すなわち社会的に男と同等の権利を有しない時代の中で、女はどのように明るい生活を手に入れるべきか。女はどのように賢く生きるべきか。「賢い＝賢明」とは勉強ができるとか、幾多の同性と比べて秀でる実務的能力があるという意味ではない。時代に即し、日常の中で自分の存在を確保できる適応力である。物質的縛りはあっても、その中で精神的自立ができ、そこに愛を見出せる才能である。漱石は社会状況に則して発生する「葛藤」に囚われる女が過去へ置いてきた「内外美」を問う。同時に、競争に囚われる男が過去へ忘れてきた「内面美」を問う。その中で個人の人間美を無視した「性別基準評価」社会の未来を問う。

この時代の「人生の明暗」を分けるものは、男にとっては「社会的地位」であり、女にとっては「結婚」である。それは「一重の壁」となり「愛の明暗」をも分ける。その壁に阻まれた環境で自分の運命に巡り会うとすれば、その運命を幾分かでも明るくする必要がある。「心の明暗」は本人の気持ちの持ち様で変化する。順応すれば白い。変化に合わせればぼやける。固執すれば暗い。ここにその色を表現した三人の女がいる。日本社会の時代分類における旧態男と結婚した理論派のお秀。発展途上の男と結婚した計算派の清子。新人類と結婚した感情派のお延。社会体制の煤けた空を眺める彼女たちの人生の明度はいかがなものであろうか。

まず、津田の妹のお秀であるが、器量望みで貰われた彼女は、遊びはするが家庭を壊すつもりのない夫との経済的に安定した生活の中で子育てをして、その環境に満足している。「外の女を女と思わない夫なら、自分も女と思わないはず。数ある女の中で、自分が一番好かれているということが愛されているという意味」と理論的に愛を捉える。心の明度は 80%以上あるだろう。

次に津田の元恋人清子であるが、数ある花を見比べて迷う津田ではなく、一輪の花を選べる男と結婚したことで明度 60%を確保するが、津田に移行するかもしれない。

そして、器量の劣りを気遣いでカヴァーする津田の妻であるお延は、愛を与えた分だけ愛が返ってくるという信念を持っているが、精一杯尽している夫に他に思っている人がいるという不安の霧に包まれているので、明度は 40%くらいだろう。

ここで男側から見ると、お秀と清子の夫は、妻は「女」である以前に父母の所有物の「娘」であるという観念を持っているので、女を自分の所有物とは捉えない。そして娘を譲り受けるというところに保証が伴う。これは社会制度的結婚観である。しかしお延の夫にとって妻は「女」でしかないので、自分の所有物と捉える。したがって自分の意に沿わない行動は気に入らない。これは自由恋愛的結婚観である。そこには保証がないため指環という保険が掛けられる。そしてお秀と清子の夫の浮気相手は商売女で肉体の問題であり、津田の浮気相手は人妻で心の問題である。いずれも心と身体の一体性を否定するものであるが、皮肉にもそこにお延自身が口にする「その人の料簡ひとつで、未来は幸福になれる」という言葉が突き刺さる。男の愛 100%獲得を目指すお延が清子に勝てるかが、新時代女全体の「明暗」の分かれ道となる。(2014.9.7)